

ほうきさん

2014年 9月



椋本673 存仁寺

お念仏は
讃嘆であり
懺悔である

「金子大栄」

— 仏 智 無 辺 —

いつしか蟬の声も聞こえなくなり、コオロギなど秋の虫たちの声が響いてきます。今年は蟬の声もいつもの年よりは少なかったように思えます。雨が多い夏でした。そして、また災害が生じ尊い生命が犠牲になりました。心が痛みます。

一日も生活のリズムが戻るよう念じつつ義援金などできることをさせていたくださると思います。さて、今年は終戦から七十回忌の年に当たりました。何もかも失われた時代から経済、文化、生活、豊かさにあふれる社会が形成されました。しかし、いまは戦後でしょうか? 「秘密保護法」「集団的自衛権」「憲法九条」の問題、ウクライナ、イラクなど世界での戦争の火種が撒き散らされるような憂いなど、いつ戦争が起ころとも限らないような情勢になりつつあります。どうか、今が「戦前」と呼ぶことのないように思いを持ち続けたいものです。八月靖国神社に官僚が参拝することの是非。お国のために命を捨てて戦った方々を祀る、顕彰することがなぜいけないのか? もちろん政教分離や特定の宗教、アジアの国々に配慮云々という意見もあるでしょうが、根本を見失わないようにしたいことです。それは、「いのちを英霊として祀る」こと、「祀るいのちと祀らぬいのち」があることです。空襲で、原爆で亡くなった方々、また、集団自決に追い込まれた方々など、同じ戦争犠牲になった多くは祀られていません。いのちに差異をつけてよいのでしょうか。いつの間にか全戦没者追悼施設の話も何処かにいつてしまいました。さて、浄土真宗の教えは「阿弥陀如来の阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生



を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生れて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。」と親鸞聖人が顕された、往生浄土のいのちであります。仏に出遇うことは無明のわが身が知らされて、顧みながら「懺悔」とそのわが身そのまま慈悲に救われ撰(おさ)めとられていることを味わう「歓喜」の人生を歩ませていただくのです。仏智に遇うことは私の生き方が問われることでしょう。今年も、初盆を迎えられ十六日灯籠送り・歓喜会法要を勤めさせていただきました。お浄土にご往生され、今仏と成られ私たちを照育下さる方々のはたらきを改めて味わいつつお互い念仏申す日々、聞法に問う日暮をこれからも務めさせていただきましよう。

住職

「お念仏は 讃嘆であり 懺悔である」 「懺悔」は今日では

「ざんげ」と読み「罪を悔い改めて許しを乞うこと」を意味します。漢訳仏典の中でも同じ意味の文脈で使われます。私たちが罪を悔い改めて許しを乞うためには罪を罪と自覚しなければなりません。凡夫である私たちは自分の罪を認めようとはせず、むしろ、他者のせいになります。これが自己中心にしかものをみることでできない我執の姿です。そんな私たちは自らの力で自己の罪を自覚することは到底できないのです。親鸞聖人は自らを「罪惡深重」とか「地獄一定」といわれていますがそれは阿弥陀如来の本願に出遇い、その智慧に照らされ、はじめて知らされた自らのあり様と姿でした。私を照らしその罪を知らしめる阿弥陀如来の智慧は、そのまま大慈悲と一体のものであり、罪惡深重の身をそのまま認めて、撰め取って捨てないはたらき(撰取不捨)に他なりません。実は仏教の「懺悔」の原語である「クシヤマ」は「広いところで許すこと」「思いやりの深いこと」を意味します。つまり「懺悔」とは智慧と慈悲が一体となった阿弥陀如来のはたらきです。お念仏は、阿弥陀如来があらゆるいのちそのものを認めて許し、讃嘆するはたらきなのです。

